

横浜市小学校社会科研究会

4 学年部会

研修会記録

第 3 号

令和元年 7月 24日

横浜市小学校教育研究会

会長 榮 秀 之

横浜市小学校社会科研究会

会長 新 井 篤 志

同 学年部長 岩 羽 純 一

【提案日時】

7月 24日 (水)

提案 権正 倫範 先生 (美しが丘小)

【会 場】

フォーラム南太田

司会 岡崎 巨樹 先生 (山下小)

記録 藤崎 恭平 先生 (二俣川小)

単元名…「自分たちの出すごみの行方を追いかけて」

○授業者からの自評、視点①について

- ・廃棄物処理について子どもたちが向き合ってほしかった。学習計画では、子どもたちが自分たちで見通しがもてるように計画を立てた。
- ・児童自ら本牧の最終処分場に行くなど、学習に対する意欲が見られた。
- ・単元をふり返ることができるように、「単元を見通す学習問題」に立ち返ったふり返りをこまめに設定した。そのため、子どもたちが学習問題を意識することができた。

○質疑応答

Q、どのあたりでふり返りを入れたのか？

A、ごみの量 (3・5時間目) を学習した後、見通す学習問題に立ち返るように意識して行った。子どもたちは意識しながらふり返りをすることができたようだった。

Q、単元を見通す学習問題を設定する際の過程は？

A、ごみ調べをして、まずクラスで分かったこと、気付いたことを共有した。そこから、子どもたちの中から疑問が多く出てきた。例えば、毎日ごみが出るのが調べて分かったけれども、そのごみは誰が回収しどのようにして処分されているのか、など。1時間目で見通す問題が出てきて、それを中心に学習を進めていくことを子どもたちと共有した。

○授業者からの自評、視点②について

- ・子どもたちは知識としてごみ処理について知っている子がいたが、それをつなげる必要があった。
- ・授業の後半にふり返りをした際には、子どもたちは自分たちができることを考えたふり返りになっていた。
- ・学習問題について授業していて悩みがあった。教師側のねらいとずれてしまうこともあったので、学習問題として設定「した」こともあった。

○質疑応答

Q、単元の中で、子どもたちの変容はあったのか。

A、前時までは、最終処分場について学習を進めていた。では、その前はどうかだったのか、事実を基にして話しを進めるようにはなってきた。教師主導ではあったが、このままでは後30年しか処分場が使えないという事実から、50年間使えるようにするためにはどうすればよいか話すことができた。

○グループごとの話し合い、全体での共有

<グループ①>

視点①…単元を見通す学習問題に立ち返ることによって、学びに筋が通るように感じた。

「単元を見通す」ことによって、計画性は生まれるだろうが、疑問が残る。本来社会は、事実を基に考えていくことであるから、計画と見通しの棲み分けが必要なのではないか。

視点②…南本牧を扱ったのは、他の県や市を出すよりよかった。横浜市民という立場で子どもたちは学習できたのではないか。

今まで事実を発言していたC28は、「自分たちの考え」を発表する場になると、黙ってしまっている。そういう子どもたちを、育てていく必要があると感じた。

<グループ②>

視点①…ふり返りのさせ方について、どうふり返り共有するかは今後も考えなければならない

視点②…子どもが手に入れない資料、事実も存在するはず。ある程度教師主導で授業展開をしていくことも必要なのではないか。

<グループ③>

視点①…グラフを最初に出すと、そこで拒否反応を示す子もいる。その点、今回の授業では、子どもの実態をしっかり把握していた。

視点②…第三文節前に、前回までの授業が活かされていることが分かった。「学習問題」を子どもたちから出させる大切さと難しさを感じた。

<グループ④>

視点①…全体の見通しが見えづらいように思えた。子の思いは生きていると思う。身近なスタートがあり、ゴールがあればよいと感じた。

視点②…C30の発言、「30年しかもたない」を、「も」なのか「しか」なのか話し合うことで深まるのではなかったか。また、自分「達」の「達」は、保護者も入るのか、それとも友達なのか。子どもたちの認識はどうであったのか。

<講師の先生より>

○社会科の難しさと言うのは、少し年度が替わるだけで情報が変わり、「当たり前だ」とされていたことも変わるというところにある。例えば昔はそのままごみを捨てていたのに、今ではリサイクルが当たり前。

○学びに向かう力、人間性が学習問題の追及であり、単元を見通す学習問題を生み出すことが関わってくる。社会的事象を知ることによって、本気の学習問題に結びついてくる。

○単元を見通す学習問題というのは、難しいもの。子どもたちの価値観と資料のズレ、「意外な事実」と出会うことは重要であるが、難しいものである。

○子どもの言葉を使った学習問題は、先生の言葉より共有しやすいという点がある。

○視点②、本気の学習問題では、子が気付いたことから考え、子が新たな事実を知り考えていく中で生まれてくるもの。

○社会のまとめとして、子どもが実生活に生かそうとするところまでが授業である。例えば袋をもらわないようにすることは行動化である。また、意識して行動することも行動化である。今まで無意識にラベルをはがしていた子が、「なぜそれをやっているのか？」を自覚的に行うこともそれである。

文責 岡崎 巨樹 (山下小学校)